

本書の特色と使い方

本書は、高校進学が決まっている皆さんに、少しでも早く高校の内容を先取りしてもらい、入学からの学習がスムーズに進むことをねらいとして編集されています。高校の国語学習の中学との大きなちがいは、古文を本格的に学習するという点にあります。高校で学習する古文は、おもに奈良時代から江戸時代にかけての文章で、日本語であることに変わりはありませんが、私たちがふだん使っているのと同じ日本語ではないか、何とかなるだろう、と侮ると大きなつまずきのもととなります。よく言われることですが、古文の学習においては、外国語を学ぶのと同じような態度でのぞむ必要があります。このことをよく肝に銘じて本書を十分に活用し、高校入学前に大きなステップをふみ出しましょう。

❁ 本書の構成 ❁

- ▶**全体の構成**……………第1講座から第3講座では、高校での古文学習の基礎となる中学での既習事項を確認します。第4講座から第6講座では、高校で学習する文法の基礎にふれてみます。第7講座以降で、高校1年で学習する代表的な作品を読んで、古文になじんでおきます。以上のような段階を追った学習で、入学後の古文の学習においてとまどうことがないように、基礎的な力を養います。
- ▶**各講座の構成**……………第6講座までは、〈ポイント〉で重要事項を頭に入れ、基本的な問題でそれを確認します。第7講座以降は、第6講座までに学習したことを中心とした設問が付いた読解問題になっています。あつかっている作品は、高校の教科書でとりあげられているものばかりです。

も く じ

第1講座・現代文とのちがい……………	P. 1
第2講座・重要古語……………	P. 4
第3講座・主語をとらえる……………	P. 6
第4講座・文語文法入門(1)……………	P. 8
第5講座・文語文法入門(2)……………	P. 11
第6講座・敬語法の基礎……………	P. 14
第7講座・竹取物語を読む……………	P. 16
第8講座・徒然草を読む……………	P. 18
第9講座・平家物語を読む……………	P. 20
第10講座・宇治拾遺物語を読む……………	P. 22

現代文とのちがひ

現代文と古文との違いを整理すると、古文では、

- (1) 歴史的かなづかいが用いられる。
- (2) 現代語にない単語や、現代語と形は同じでも意味の異なる語（古今異義語）が使われている。
- (3) 体言や助詞などがしばしば省略される。
- (4) 用言の活用の種類や活用の仕方および助動詞・助詞の用法が現代語と異なる。

などの点があげられる。詳しくは高校へ入ってからの学習に譲るとして、ここでは、中学の復習もかねて(1)～(3)について学習しよう。

◆ 歴史的かなづかい

ポイント

- ① 語頭にこない「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」と読む。

例 かほ(顔) ↓ かお あはれ ↓ あわれ

- ② 「ア段音十う(ふ)」は、オ段の長音で読む。

例 かうべ(頭) ↓ こうべ やうす(様子) ↓ ようす

- ③ 「イ段音十う(ふ)」 「エ段音十う(ふ)」 は、拗長音で読む。

例 しう ↓ しゅう てふ ↓ ちよう

- ④ 「きゃう・ちやう・りやう」などは、「きよう・ちよう・りよう」と読む。

例 びやうぶ(屏風) ↓ びようぶ

- ⑤ ワ行の「ゐ・ゑ・を」は「い・え・お」と読む。

例 ゐる ↓ いる をかし ↓ おかし

- ⑥ 「くわ・ぐわ」は「か・が」と読む。

例 ぐわいぶん(外聞) ↓ がいぶん

- 1 次の語を現代かなづかいに直しなさい。

(1) あはれ	(2) かへる
(3) まるる	(4) けふ
(5) にほひ	(6) かうし
(7) こずゑ	(8) はふる
(9) うぐひす	(10) をさなし
(11) ひうが	(12) だいくわん
(13) わづらひ	(14) しゃうぐん

- 2 次の漢字の読みがなを歴史的かなづかいで書きなさい。

(1) 庭	(2) 通る	(3) る
(3) 賜る	(4) 水	(5) ふ
(5) 一声	(6) 候ふ	(7) ふ
(7) 諸行	(8) 果報	(9) ふ
(9) 高名	(10) 装束	(11) ふ

◆ 古今異義語

- 3 次の——線部の古語の意味を書きなさい。

(1) 雨など降る <u>も</u> をかし。	()
(2) 冬は <u>つとめて</u> 。	()
(3) <u>すさまじき</u> もの。昼ほゆる犬。	()
(4) <u>うつくしき</u> もの。瓜に書きたる児の顔。	()
(5) <u>すべていふも</u> おろかなり。	()
(6) <u>ありがたき</u> もの。舅にほめらるる婿。	()

へポイント

① 時刻と方位の表し方

・ 十二支を用いる…子・丑・寅・卯・辰・巳・午・羊・申・酉・戌・亥
 ・ 時刻は午前〇時を「子の刻」として、以降二時間おきに「丑の刻」「寅の刻」と下がっていき、正午を「午の刻」、午後十時を「亥の刻」として一日を終える。

・ 方位は、北を「子」として、以下右回りに三十度ずつ「丑」「寅」と下がっていき、東を「卯」、南を「午」、西を「酉」として三六〇度を示す。

② 月の異名

〔春〕 一月…睦月 二月…如月 三月…弥生
 〔夏〕 四月…卯月 五月…皐月 六月…水無月
 〔秋〕 七月…文月 八月…葉月 九月…長月
 〔冬〕 十月…神無月 十一月…霜月 十二月…師走

8 次の月の異名をそれぞれ漢字で書きなさい。

一月 () 二月 () 三月 ()
 四月 () 五月 () 六月 ()
 七月 () 八月 () 九月 ()
 十月 () 十一月 () 十二月 ()

9 次の時刻や方位は、現在の何にあたるかをそれぞれ書きなさい。

(1) 子の刻 () (2) 巳の刻 ()
 (3) 午の刻 () (4) 辰の刻 ()
 (5) 丑の刻 () (6) 申の刻 ()
 (7) 卯の方角 () (8) 酉の方角 ()
 (9) 午の方角 () (10) 子の方角 ()

練習問題

① 次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

神無月のころ栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入る事侍りしに、はるかなる苔の細道を踏みわけて、心ぼそく住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるるかけひのしづくならでは、つゆおとなふ物なし。あか棚に菊・紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。

かくてもあられるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に大きな柑木の木の枝もたわわになりたるが、まはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばとおぼえしか。

(注1) かけひ||地上に竹などを架け渡して水を通すとい。

(注2) あか棚||仏に供える水や花を置く棚。 (注3) 柑子||みかん。

問一 線①「神無月」の読み方と、陰暦何月の異名であるかをそれぞれ

答えなさい。

読み方

何月

問二 線②・③を口語訳する場合に補うべき助詞を、それぞれひらがな

一字で書きなさい。

②

③

問三 線④「少しことさめて」の部分を口語訳しなさい。

問四 線⑤のあとに省略されている言葉を、口語で書きなさい。

問五 線a・b・cをそれぞれ現代かなづかいに直しなさい。

a [] b [] c []

高校準備講座

古文

解答と解説

第一講座 現代文とのちがい

P153

- 1 (1)あわれ (2)かえる (3)まいる (4)きょう (5)におい (6)こうし (7)こずえ (8)ほうる (9)うぐいす (10)おきなし (11)ひゅうが (12)だいかん (13)わすらい (14)しょうぐん
- 2 (1)には (2)とほ(る) (3)たまは(る) (4)みづ (5)ひとこゑ (6)さうら(ふ)(7)しよぎやう (8)くわほう (9)かうみやう (10)しやうぞく
- 3 ㊦(1)趣がある (2)早朝 (3)興ざめな (4)かわいらしい (5)不十分だ (6)めったにない
- 4 (1)ア (2)イ (3)ウ (4)イ
- 5 ㊦(1)心さびしい (2)非常に (3)ふと目がさめると (4)みすばらしい (5)かわい (6)我慢して
- 6 (1)が (2)に (3)の (4)は (5)が・を
- 7 ㊦(1)桜の花は、一重であるのがよい。 (2)鳥が飛びいそぐことさえ、しみじみとしたものを感じさせる。
- 8 一月Ⅱ睦月 二月Ⅱ如月 三月Ⅱ弥生 四月Ⅱ卯月 五月Ⅱ皐月 六月Ⅱ水無月 七月Ⅱ文月 八月Ⅱ葉月 九月Ⅱ長月 十月Ⅱ神無月 十一月Ⅱ霜月 十二月Ⅱ師走
- 9 (1)午前0時 (2)午前10時 (3)午後0時(正午) (4)午前八時 (5)午前二時 (6)午後四時 (7)東 (8)西 (9)南 (10)北

【解説】 1 歴史的かなづかいの用法は、古文の基本である。完全にマスターするためにも、できるだけ多くの文章を音読して慣れるようにしよう。 2

(6)はポイント②、(7)・(9)・(10)はポイント②と④、(8)はポイント⑥を参考にしよう。 3 (1)Ⅰ(6)の中には、既に中学のうちに学習したものもある。基本的に古語なので、現在の意味との違いに注意して完全に覚えてしまおう。

4 各文の口語訳は以下の通り。(1)昔、男がいて、その男に大変親しい友人がいた。(2)こんな様子であるのが、大変気の毒だ。(3)このように意外な作りごとであったから……。 (4)世間で評判になっている光源氏の君を……。 5 (1)「さうざうし」には「心さびしい」のほかに「何となく物足りない」意がある。現代語の「騒々し」と混同しやすいので十分に注意すること。(3)「おどろく」には「目が覚める」のほかに「はっと気がつく」の意味もある。(4)この場合の「あやし」は「賤し」で、「不思議だ・変だ」の場合は「怪し」と書く。 6 ポイントにもあるように、古文では「が」「は」「を」「の」などの格助詞が省略されることが多いことを覚えておこう。 7 (1)古文で、単に「花」とある場合は、だいたい「桜」のことであると考えてよい。

練習問題

問一 読み方Ⅱかんなづき 何月Ⅱ十月 問二②が ③を 問三 ㊦少し興ざめがして 問四 ㊦どんなによかったことだろう 問五 a いう b おこのう c まわり

【解説】 問二②は「庵がある」、③は「菊・紅葉などを折りちらしてあるのは」となる。 問三 興ざめがしたのは、柑子の木の周りが嚴重に困ってあった

(「まほりをきびしく困ひたりし」)からである。 問四「ましか」は反実仮想の助動詞で、「もし〜であったら〜であろうに」の意。

【口語訳】 陰暦十月の頃、栗栖野(こしやの)という所を通り過ぎて、ある山里に尋ね入ったことがありましたが、はるかにずっと続いている苔(こけ)の(生えている)細い道を踏み分けて行くと、(その細い道を踏み分けて)心細く住みついている人の庵(いほ)がある。木の葉で埋すまっているかけいの水のしずく(の音)以外には、少しも音を立てて訪れて来る者もない。あか棚(あかたな)に菊や紅葉などを折って雑然と置いてあるのは、(こんな山里の寂しい所であるから、人も住んでいないように見えるが)それでもやはり住む人がいるからなのであろう。このようにしても住んでいられるのだなあ、しみじみと感慨深く見てい

るうちに、向こうの庭に、大きな柑子こしの木で、枝もたわむほどに実がなっているのがあって、(その木の)囲りを嚴重に(取られないように)囲いをしてあったのは、(せっかく風流な住居であると感嘆して見ていたのに)いささか興ざめがして、この柑子の木がなかったとしたら、(どんなによかったことだろう)と思われたことだ。

第2講座 重要古語

P 455

1 例(1)おおせい (2)みつともない (3)たいそう (4)すばらしく (5)なんとかして (6)似つかわしい (7)思慮がない (8)だんだん

2 例(1)ございました (2)すばらしく見える (3)きまりの悪いもの (4)趣深い(5)理想的だ (6)とても出発できない (7)大変かわいらしい様子で (8)咲きかけようとする (9)気のひけるほど立派な人 (10)ものさびしく (11)たいそう(12)することもなく退屈なのに (13)情けないことだ (14)つまらないからであるうか (15)ただちに (16)思いがけなく

【口語訳】 1 (1)ある所に、女房がおおせいいて……。 (2)ああ、みつともない、お入りください。 (3)たいそう小さな塵ちりが落ちていたのを……。 (4)桜の花がすばらしく咲いているのに……。 (5)なんとかしてこのかぐや姫を手に入れたいものだ、見たいものだ。 (6)たいそう寒い時に、火など急いで起こして、炭を持って部屋の方へ行くのも、いかにも(冬に)似つかわしい。 (7)思慮がないと思われる者も、すばらしい一言を言うものだ。 (8)だんだんと白くなってゆく山の辺りが、少し明るくなって……。

第3講座 主語をとらえる

P 657

1 (1)高野の聖 (2)手のわるき人 (3)童 (4)人

【解説】 (3)主語を「孔子」とまちがわれないように注意しよう。その理由は、孔子を主語とする述語には「たまふ」が用いられているのに、ここでは敬意のない「あひぬ」が用いられているからである。

2 問一①雀の子(の) ②(二)三つばかりなる(ち)こ(の) 問二筆者(作者)

【口語訳】 かわいらしいもの。瓜うりに描いてある小さな子ども顔。チュウ、チュウとねずみの鳴きまねをすると、こおどりして飛んでくる雀の子。二つか三つくらいすずめの小さな子どもが、大急ぎではつてくる途中で小さな塵ちりの落ちてくるのを目ざとく見つけて、大変かわいらしい指先でつまみあげて大人などに見せたりするのは、本当にかわいらしい。

3 (1)①その(肉の)影 ②ある犬 (2)①良覚僧正 ②人 (3)①人 ②なりひさ(こ)といふ物) ③許由(といひつる人) (4)①親 ②みのむし ③みのむし

【口語訳】 (1)ある犬が、肉をくわえて川を渡っていた。川のまん中あたりで自分の姿が水に映って大きく見えたので、「私がくわえている肉よりも大きい。」と心に思って、自分のくわえている肉を捨てて水に映っている肉を取ろうとした。 (2)従二位藤原公世の兄で、良覚僧正りょうかくそうじょうと申し上げた人は、このうえなく怒りっぽいなであった。僧坊のかたわらに大きな榎えのの木があったので、世間の人は「榎の僧正」と言ったそうだ。 (3)中国に許由きよという人がいたが、(その人は)まったく自分の家財道具を持っていなくて、水を飲むのにさえ手ですくって飲むのを(周りの人が)見て、なりひさこというものを人が持たせたところ、ある時、(それを)木の枝にかけておいたのが風に吹かれて鳴ったので、うるさいといって捨ててしまった。 (4)みの虫には、本当にしみじみとしたものを感じる。鬼が生んだので、親に似て、(この子も)恐ろしい心があるだろうと、親が粗末な着物を着せて、「もうすぐ秋風が吹くようになったら、(迎えに) やって来るつもりだ。(それまで) 待っていなさいよ。」と言い置いて、逃げて行ったのも知らないで、風の音を聞いて(秋が来た)と知って、八月ごろになると、「ちちよ、ちちよ。」と心細そうに鳴くのは、ひどくかわいらしい感じがする。

4 問一①亀山殿 ③大井の土民 ④水車 ⑤亀山殿 問二②アガイに ⑥ウがアに 問三ウ

【解説】 問一①・⑤はともに尊敬の助動詞「られ」が用いられていることから、動作の主体は「亀山殿」であることがわかる。 問二⑥は「参る」という謙讓語に着目する。 問三水車を見事に造りあげたのはだれか、を考える。